

# 生かされた命

アン（宮城県）

あの日から、1年6か月、街のあちこちで復興の兆しが見られる中で、私の心の中ではまだまだ、あの時のキズが大きく傷口を開け、あの日の光景がフラッシュバックをして胸を締め付けている日々です。

東日本大震災のあの日、私は、自分の職場である、小学校の児童クラブの指導員として教室の中にいました。一年生の子ども達数名が入室し、宿題を出し始めた直後の大地震。部屋の中の大きな冷蔵庫が倒れ、校庭に面している子ども達のげた箱が数メートルも飛び、子ども達が錯乱する中、学校の指示に従い校庭の中央に集まりました。

私の父は逃げる事もなく、自宅の台所で津波の為に亡くなっていました。津波なんて来るとは思っていなかったらしく、数時間前に夫が逃げるように仕事の合間に来てくれたようですが、耳を傾けなかったようで、2階にいた母だけは無事でした。

私は、7か月、小学校の避難所で約1800名と共に、炊き出しのリーダーとして生活をしてきました。班の中には、小学生の子どももいて、時には母親代わりに叱ったり、子育ての相談にのったり、夜泣きをする幼児もいて、自分自身を確立させていくのがやっとでした。

今回の震災では高齢者も多く避難をし、「生きる」という意味を改めて感じました。親と子どもの絆が出来ていけば、震災でも一緒に立ちあがる事ができると思います。母親は、いつも子どもの心を読み、手をつなぎ、愛情を込めて育てていく事。

しんしんと降る雪の中、子ども達の防寒着や上靴を取ってくるのに、同僚が部屋に戻っている間、泣き叫ぶ子どもを抱いて待機していました。

広報の無線から「津波警報」がだされたのは、30分位してからだったと思います。

「中学校に避難して下さい」と、学校の先生方、他の児童と共に徒歩で数分の近くの中学校に着く頃には、広報の方が「津波が来る、いそげ」と皆に呼びかけました。子どもの手をつなぎ、3階の教室までかけあがり、一部屋に住民の方々も含め70名位で過ごしました。

食べる物もなく、児童クラブの部屋にあったおやつを何度も運び、皆で子ども達中心にあげました。懐中電灯を頼りに眠れない一夜が過ぎました。

次の朝、子ども達をほとんど親元に引き渡してから、自宅に戻るまでの状況は、私が今迄経験した事のない光景でした。

ごく当たり前な事ですが、震災当日一番感じた事でした。

現在、応急仮設住宅に入居して、今春から異動となった児童クラブに通勤しています。

子ども達と一緒に様々な防災についての研修にも参加しています。「生かされた命」決して無駄にはしないで、私のメッセージです。

